

おかみさんは、ジャックをなかへ入れて、パンとチーズとミルクをくれました。ところが、半分も食べないうちに、ズシン、ズシン、ズシン、と大きな足音がして、家がぐらぐらゆれだしました。おかみさんは、

「まあ。うちの人が帰ってきたよ。急いがかまどの中に隠れるんだ」といって、**ジャックをかまどにおしこみました**。そこへ、大男が入ってきました。

「ジャックと豆の木」 語りの森

むかし、びんがひとつ、馬車からおちて、のなかのまんなかに、ころんでいました。そこへ、こねずみが、ちよろちよろやってきて、びんをみつけました。そして、「これは、すてきなおうちだが、いったいだれがすんでいるのだろう」と、おもいました。

そこで、こねずみは、たずねました。

「小さなおうち、小さなおうち、いったいだれがすんでいるの？」

けれども、へんじがありません。こねずみがのぞいてみますと、だれもいませんでしたから、

「しめしめ、それじゃ、ここへすんでやろう」

そういって、**びんのなかにすむことにしました**。

「小さなおうち」 『世界のむかし話』瀬田貞二訳

このあと、かえる、うさぎ、きつねがつぎつぎにやってきて、びんの中にすみまます。ロシアの昔話です。

こびとたちは、

「この人を、あの黒い土の中にうめることはできない」といいました。

**こびとたちは、外から白雪姫を見ることができるよう、ガラスの棺をつくらせ、白雪姫をその中に寝かせました**。そして棺に金文字で、名前と、それが王女であることを書きつけました。それから、棺を山の上にかつぎあげて、ひとりがいつも見張り番をすることになりました。

**白雪姫は長い年月、棺の中に横たわっていました**。

「白雪姫」 『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳

ラプンツェルは、お日さまの下でいちばん美しい子どもになりました。ラプンツェルが十二歳になると、**魔女はラプンツェルを高い高い塔の中にとじこめました**。塔には、**ドアもなければ階段もなく、上のほうに小さな窓がひとつあるだけでした**。

「ラプンツェル」 『語るためのグリム童話1』小澤俊夫監訳

魔女は細い手でヘンゼルをつかみ、小さな家畜小屋へつれて行って、格子戸の中にとじこめました。ヘンゼルは大声をあげてさげびましたが、どうにもなりませんでした。それから魔女はグレーテルのところへ行って、

「さあ、おきるんだ、このなまけ者め。水をくんできて、家畜小屋にいる兄ちゃんに何かうまいものをつくってやりな。あいつが太ったら食べるんだから」といいました。

.....

「ばかだね、おまえは。パン焼き窯の口はこんなに大きいじゃないか。よく見てな、こーやるんだよ」といって、よたよたとパン焼き窯に近づき、頭をパン焼き窯の口へつっこみました。

そのとき、グレーテルが魔女をパン焼き窯の中へおしこみ、鉄のとびらをしめ、かんぬきをかけてしまいました。

「ヘンゼルとグレーテル」『語るためのグリム童話1』小澤俊夫監訳

馬方が、

「木のからと、木のからと」と、ささやくと、やまんばは、

「火の神さんがいうんじゃあ、木のからとにしよう」といって、木のからとにはいつて寝ました。

「馬方やまんば」『日本の昔話5』小澤俊夫再話

「からと」は、「唐櫃」と書き、「からびつ」ともいいます。脚のついた箱で、宝物や着物などを入れて湿気から守ります。

ある日、じきは山へ柴刈りにいき、ばさは川へ洗濯にいきました。はさが川で洗濯をしていると、川上から、小さな香箱がふたつ流れてきました。ばさは、

「実のある香箱、こっちへこい。」

実のない香箱、あっちへいけ」

といました。すると、実のない香箱は、「えーんえん」と泣きながらあっちへ流れていき、実のある香箱は、「にこん、にこん」とわらいながらこっちへ流れてきました。

ひろってあけてみると、中には、てのひらにのるくらい小さな子犬がはいていました。

「花咲かじい」『日本の昔話1』小澤俊夫再話

「香箱」は、香木などを入れておく蓋つきの箱です。